マルクス主義者としての初期の活動

――毛沢東㈢[1]――

中屋敷　宏

問題の所在

トルストイ主義やアナキズム思想によって、人間生活の理想と社会の理想像を探求してきた青年毛沢東は、ロシア革命の衝撃と自らの湖南自治運動の体験から、マルクス主義＝ボルシェヴィキの革命論を、唯一の可能な社会変革の方法として受けいれたのであった。それが毛沢東におけるマルクス主義の受容の内容であった。つまり毛沢東においては、マルクス主義は理想主義的情熱によって、その理想実現のための最も有効な方法として選択されたのである。

しかし、この思想選択は単なる思想信条の次元にとどまるものではなく、現実世界における自己の生き方、その社会的実践と緊密に一体化したものであった。それはソビエト・ロシアが指導する世界革命の運動体＝コミンテルンの組織に身を投じ、その指導の下に革命運動に挺身するということを意味していた。毛沢東はそのことを理解し、そのことのみが唯一の中国社会変革の道だと確信し、自己の思想としてマルクス主義を選択することを、新民学会の会員達の前に宣言したのであった。

しかし運動の現実とは、決して思想が指し示すような理想主義的なものではない。コミンテルンの運動は、高く世界革命と人類解放の旗を掲げてはいたが、それはソビエト国家の国家的利益を擁護するための運動という色彩を強くしていたし、運動の実態は、「鉄の規律」の名の下に、理不尽な命令主義が横行するという世界であった。特にコミン

テルンの中国革命路線＝国共合作という政治路線は、矛盾に満ちた一つの策略にしか過ぎなかった。当然の結果として、その内部では国共両党による政治的暗闘がくり返された。そしてそれは軍事クーデターによる大殺戮という破局に向かって突進んで行ったのであった。

毛沢東が理想主義的情熱によって選択した思想の現実の姿は、その美しい理想とはあまりにも異るものであった。しかし、運動の現実が理想と異るからと言って、すぐに思想を放棄する程に、毛沢東の精神は脆弱ではなかった。彼は中国においてマルクス主義運動を組織するために、自己の全情熱を傾注して活動を展開する。国共合作という政治劇に対しても、その中に自己の理想主義的意図を貫徹するために、毛沢東は誠実に自己の全力をつくして活動する。しかし、彼の活動は無残な失敗に終る。そして彼自身はあまりに国民党側により過ぎたという理由で、党内で厳しい批判にさらされる。

一九二四年末、毛沢東は病気を理由に中共中央の仕事を離れ、故郷韶山へ引上げることになる。一九二三年四月に長沙を離れて広州に出、広州と上海で中共党と国民党の最高幹部の一人として活動するようになって二年足らずの時間である。上海での革命運動の第一線を離れて故郷韶山へ引上げるという事は、毛沢東にとっては疑いもなく一つの挫折の経験であった。彼は故郷で農民運動の経験を積み、一九二五年十月には再び広州に現れる。しかし、その時の毛沢東は、それ以前の毛沢東と大きく異った人間としてであった。彼はそれ以後ひたすら農民革命という自己の信ずる革命路線を追究していくことになる。

第一次国共合作時における毛沢東の挫折の体験は、革命家毛沢東にとって最初の転機であった。この経験を通して毛沢東が何を考え、何と訣別し、何を確信したのか。この問題を考える事の中に、中国の革命家としての毛沢東の誕生を解明する、一つの重要な鍵がある。しかし、現在の中国における毛沢東研究は、必ずしもこの問題を十分に解明

しているとは言い難い情況にある。その原因としては、二つの事が考えられる。一つは第一次国共合作に対する評価が、未だ定っていない事である。[1] 国共合作そのものへの評価が確定しない限り、この運動の中に居る毛沢東について評価し難いという事情がある。もう一つの問題は、当時における陳独秀と毛沢東との関係である。実は当時の毛沢東は、陳独秀と非常に近く、国共合作に対する態度においては、殆んど同一の立場に立っていたのである。この事実は現在の党史の中で確立している「毛沢東像」に対して、あまり都合のいいものではない。この事情もこの時代の毛沢東の実像を解明する上での妨げとなっている。

本稿はこの種の毛沢東に対する一切の因われや既成観念を排して、マルクス主義者としての初期の毛沢東の姿を人間の成長史という観点から再構成することを目的としたものである。欽定党史が言うように、毛沢東は一貫して「正しかった」のではなく、毛沢東も成功と失敗の経験を繰り返しながら、その体験の中で人間的にも、思想的にも成長していったのである。特に第一次国共合作期における挫折の体験は、その後の「中国的革命家」毛沢東の誕生にとっては、非常に大きな意味を持つ出来事であった。この政治的挫折の体験の中で毛沢東は、マルクス主義やコミンテルンの指導する革命運動、そして国共合作という中国革命の現実に対し何を感じ、何を考えたのか。そして彼自身は一人の人間として何を感得し、何を決断したのか。まさにこれらの問題こそは、われわれが探求せねばならない課題そのものである。本稿の課題は、これらの問題に毛沢東の人間的、思想的な成長という観点から光を当てることにある。

第一節　結党と労働運動

(一)結党の準備活動

毛沢東がマルクス主義を選択したことを、新民学会の会員に明らかにしたのは、一九二〇年十二月に書いたフランスの会員に宛てた手紙においてであったが、彼はそれ以前から既に共産党結党の準備活動に入っている。文化書社の設立、ロシア研究会の組織、社会主義青年団の結成、日曜同楽会の結成といった活動がそれである。

文化書社は七月二十一日、湖南の「大公報」紙上に「文化書社を発起する」という文章を発表し、八月二日に発起人会議を開き、八月二十日から営業を開始している。発起人には、長沙県長姜済覚、商会会長左学謙、第一師範校長易培基、周南女学校長朱劍帆といった、湖南社会での有名人が名を連ねている。マルクス主義とは近代啓蒙思想の言わば頂点に立つものであって、マルクス主義運動が成立するためには、それ以前に近代思想の広い社会的基盤が存在していなければならない。文化書社とは、このような使命と目的を持った、共産主義運動の準備活動の一環をなすものである。発起人に湖南社会の有名人士を動員した所に、広い世論の支持を意識した毛沢東の周到な配慮を見ることができる。毛沢東は書社の目的を「文化書社は最も迅速に、最も簡便な方法で、中外各種の書物、新聞、雑誌を紹介し、青年とすべての湖南人の新研究の材料を充たすことを願うものである」(1)と書いている。

この毛沢東の言葉通りに、文化書社が取扱った書物の範囲は非常に広い。胡適、トルストイ、デューイ、ラッセル、クロポトキンの書物から「マルクス資本論入門」「社会主義史」「新ロシアの研究」「労農政府と中国」というマルクス主義のものまで、近代思想全般にわたっている。新思想と新しい知識に飢えていた湖南の人々、特に青年達に文化書社が提供する書物は非常に歓迎され、営業的にも成功している。一九二一年までには平江、衡陽、宝慶等の七ケ所に支社を設け、第一師範、第一附小等の七ケ所の学校には販売部を設けるまでになっている。毛沢東は読者に読書会を組織することを呼びかけており、人材選択の場とすることも意図したようである。党組織が生れてからは、「党の秘密連絡機関」となり、幾人かの活動家の生活を支えるという役割もはたしている(2)。一九二七年の反革命の嵐の中で閉鎖

されている。

「ロシア研究会」は、文化書社よりもより目的を明確化したものである。それは会の目的を、「本会はロシアのすべての思想を研究することを目的とする」と明確に規定し、行うべき事業の内容を、ロシア研究叢刊の発行、ロシアの実地調査、ロシアへの勤労倹学運動等をあげている。[3] 八月二十一日長沙県知事公舎において二十数名の参加者をもって発足している。数回の研究会を開き、ロシア人講師を招いてロシア語講習会を開いたくらいで、それ以上の活動はしていない。後にこの会員であった任弼時、肅勁光はロシアに留学している。[4]

社会主義青年団は、結党準備の最終段階である。陳独秀は上海でこの年八月既に社会主義青年団を結成しており、その規約が毛沢東の手元に届くのが十一月中旬である。この頃から毛沢東の活動は、活発化している。その様子は当時の第一師範の学生張文亮の日記に記録されている。[5] 十一月十七日には「沢東の手紙を受取る。青年団規約十部を送ってくる。目的は社会改造を研究し、実行することである。日曜日午前中に会うことを約束し、私に同志を捜すようにとたのんだ」と書いており、また二十一日には毛沢東が「青年団は今は真の同志を捜すことに注意すべきで、ゆっくりとやり、急いではいけない」と語ったと書いている。十二月二日には、陳独秀が来て成立大会を開くまでは、研究と実行に分けて進めねばならないと言い、「多くの真の同志をさがすように頼んだ」と書いている。また十二月十五日には、毛沢東が手紙で「青年団は校内で団員を作るように努力すべきで、出来る限り本年中に会合を開かねばならぬ」と書き送ってきたと書いている。

この張文亮の日記は、陳独秀と連絡をとりあって、社会主義青年団の結成に奔走する毛沢東の姿をよく伝えている。毛沢東は「真の同志」となるべき人間を捜し求めていたのである。しかし焦らずに、あくまでも慎重に進めていく所に、毛沢東らしい特徴がある。湖南の社会主義青年団は、中国でも最も成功したものの一つである。一九二一年には

四十数名、二三年は七九〇名と全国団員数の実に六三パーセントを占める大組織となっている。[6]

「日曜同楽会」は、この頃の活動である。学生の中には病気になる人が多く、新民学会の会員の中には死亡した人も数人いる。毛沢東は身体を鍛練する目的で、この活動を始めたのである。日曜日毎に、各地の名所旧跡をたずねたり、舟遊びをしたりするのである。二〇年から二一年にかけて十数名の参加者をえて、何度か行われている。

毛沢東がマルクス主義を選択することを表明するまでには、彼はこのように充分な準備活動を行っている。そしてこのような活動の中で、マルクス主義こそは中国を変革する思想だという確信を持つに到ったのである。その結果が、前述した手紙によるマルクス主義を選択するという決意の宣言であった。毛沢東にとっての思想の選択とは、このように、それ以後の自己の生涯をそれに托していくかどうかという、言わば全人間的存在そのものをかけた行為であり、自己の人生の実践と不可分の一体のものとしてあった。

この間毛沢東の胸中を去来する想いがいかなるものであったかは、彼自身何も語っていない。しかし、この時代の彼の親友蕭子昇の証言によって、その一部を知ることはできる。蕭子昇は次のような毛沢東の言葉を記録している。

「多くの人は現状に不満である。もし我々が改造を進めるのであれば、必ず革命しなければならない。我々の革命が成功する最上の方法は、ロシアを模範とする事である。ロシア共産主義は我々に最も適合的な制度であり、また我々が最も早く追随すべき制度である。これは我々の歩くべき唯一の道である。私は心から君が我々と一緒にこの道を歩くのを希望する」。[6]「もし我々が力を合わせて進めば、共産党は三十年から五十年の時間で、中国を統治することができるかもしれない」。[7]

回想記の記述を、そのまま事実とすることには慎重でなければならないが、この蕭子昇の記述は、毛沢東のマルクス主義の選択という事実の背後にあった気持を伝えるものとして読むことができる。毛沢東のマルクス主義選択とい

う事実の背後にあったものは、中国社会の現実を絶対的に変革すべき対象としてとらえる青年の理想主義、その変革の方法としてのボルシェヴィキ革命に対する絶対的確信、そして中国におけるその成功と勝利の可能性に対する大いなる希望であったのである。粛子昇のこの証言をわれわれは信頼してもよいであろう。毛沢東はこの種の信念と希望に鼓舞されながら、中国におけるマルクス主義運動の形成に身を投じていったのである。幸いこの信念に鼓舞された人々は、中国各地に散在し、各地でそれぞれの運動を組織しつつあった。そしてそれらの運動を統合する事が最大の問題となりつつあった。中共党の結成こそがそれであった。

(二)中国共産党第一回全国大会

中国共産党を結成する第一回全国大会は、一九二一年七月二日から上海のフランス人租界にある李漢俊の家で開かれたが、大会四日目にフランス人警察の捜索を受けたので、翌日は会場を嘉興南湖の船上に移し、無事終了している。参加者は全国各地及び日本留学生の共産主義小組を代表する十三名、それにコミンテルン代表マーリン、赤色労働組合インター代表ニコンスキーを加えて全部で十五名である。大会は「綱領」(1)と「大会決議」(2)を採択し、書記陳独秀、組織委員張国燾、宣伝委員李達の三人からなる中央局を選出して終わっている。

大会で決定した「綱領」は、党の任務として資本家階級の政権打倒、階級のない労働者国家の創造、私有財産の廃止、公有制の実現、プロレタリア独裁の実行を規定している。また他党派との関係については、第三条で黄色知識階級分子及びその他の類似の党派とは、一切の関係を絶つと規定している。また党員については、十四条で党員は官吏及び国会議員になることはできない、と規定している。また「決議」では、党の基本任務が労働組合を組織することにあるとし、そのための宣伝、労働学校と労働問題研究機関の創設、他の政党への態度、赤色労働組合インターとの

関係を規定している。全体として「共産党宣言」そのままの原則主義が貫いており、他党派、他組合を拒絶する硬い姿勢が目立っている。

大会で討論された問題については、大会参加者の回想録によって食違っており、必ずしも特定できないが、次の二つの問題であったと考えられる。[3] 一つは李漢俊と劉仁静の間で論争された、党の性格についての意見の対立である。李漢俊の主張は、党はマルクス主義理論の研究をする政党であるべきで、出身階級にとらわれず、マルクス主義を理解した人間でありさえすれば、すべての人間を受け入れるべきだとするものである。これに対する劉仁静の主張は、党は労働者階級の中に建設すべきもので、それは社会主義革命のために闘う労働者党であるべきだというものである。もう一つの問題は、党員は官吏と国会議員になってはならない、という党員の資格に関するものである。この規定には李漢俊と陳公博が反対した。李漢俊は河上肇の影響を受けて帰国した日本留学生であり、当時は「新青年」の編集に従事していた。陳公博は北京大学出身の知識人で、当時は広東の大学教授であり、国民党の宣伝員養成所の所長、雑誌編集長もつとめていた。二人の反対は自分の現在の地位ともかかわるが、党員の資格を緩やかなものにすることを主張したのである。

大会の決定は二つの討論において、いずれも厳しい原則論が勝利したことをしめしている。このような討論が行われた大会で、毛沢東はいかなる態度をとり、いかなる発言をしたのか。数人の回想録で一致していることは、毛沢東がこの大会において、重要な発言をしなかったという事である。劉仁静は「〝一大〟の会議では毛主席の発言は少なかったが、十分に注意して他人の発言を聞いていた」[4]と書いているし、包僧恵は「第一回代表会議の中で、私の彼に対する印象は、穏健で自重し、沈黙して言葉が少ないという事であった。発言せねばならぬ時には、沈着で力のある発言をした。これ以外には、彼に対しては深い理解はない」[5]と書いている。ただ張国燾だけは、かなりの悪意をこめて

次のように書いている。「彼は大会前も大会中にも、具体的な主張を提出しなかった。しかし彼は能弁で、弁舌がうまく、他人と雑談する時はいつも落し穴を仕掛けるのを好んだ。もし相手が注意せず、その中に落ち、自己矛盾の苦境に立つと、得意気に笑った」(6)。

これらの回想は、大会で毛沢東が重要な発言をしなかった、という点では一致している。しかし、毛沢東がその間何を感じ、何を考えていたのか、この問題をこれらの回想から知ることはできない。その点李達の回想は、この問題に対してわれわれが推測する手がかりを与えてくれる。李達は次のように大会での毛沢東の姿を書いている。「毛沢東同志は代表が住む部屋の一つにいたが、いつも歩きつつ考え、頭をかいては思索していた。彼の苦心の思索は、ついにこのような地点にまで達していた。同志達が窓の前を通って彼に声をかけても、彼はふり向いたことがなかった。何人かの同志は、彼の気持ちが理解できず、〝本の虫〟とか〝神経質〟とか言った。彼が長沙に帰って、いかに仕事を進めていくかを計画している事も、中国革命の事業を発展させる方法に思いをめぐらしている事も知らなかった」(7)

この李達の回想は、大会に対する違和感にとらわれ、一人自己の想念に沈潜する毛沢東の姿を伝えている。この大会の主席をつとめたのは張国燾であり、彼のリードによって大会は運営されている。彼は北京大学出身者であり、他の出席者の大半も学生や留学生であった。彼等に共通しているのは生活経験の乏しさである。大会の決定がしめしているように、彼等の議論には理論的原則を強調する観念的性格が強かった。毛沢東は現実感覚を欠如させた、彼等の観念的議論には馴染めなかったのである。毛沢東が湖南で積重ねてきた政治闘争の経験から得たものは、これらの知識人達の議論とは対極にあるものであったからである。広く大衆の支持を集めうる運動でなければ、政治闘争において勝利する事はできない。それは毛沢東が実践の中で獲得した信念であった。張国燾を初めとする学生出身の知識人の議論は、毛沢東のこの信念とあまりにかけ離れていた。彼はこの大会の議論に烈しい違和感を感じ、その中にとけ

こむ事ができなかったのである。李達の回想が伝えるのは、このような毛沢東の姿である。これら理論原則のみに依拠した観念的知識人との出会いは、その後毛沢東が党内で闘いを続けねばならなくなる、あの教条主義者という「敵」との最初の出会いでもあったのである。

㈢湖南での結党活動

一回大会が終ると毛沢東はすぐ湖南に帰り、大会の決定通りに共産党湖南支部の結成と、労働運動の組織化にとりかかる。しかしその手法は大会の決定とは全く異なる毛沢東独自のものであった。中国共産党湖南支部が成立するのが十月十日、中共湖区委員会が成立するのは一九二二年五月末である。毛沢東は書記である。この間、毛沢東は衡陽、平沢、岳州等に党支部を結成するために奔走しているが、この間一九二二年夏、衡陽で行った講演の記録が残っている。(1)この講演の記録を読むと、社会主義運動にかけていた当時の毛沢東の理想主義的情熱がひしひしと伝わってくる。

講演の題目は「社会主義」である。毛沢東は最初に、青年が現状社会に不満を持ち、社会を改造しようという気持を持っていることは、非常によい事だと言う。続けて社会を改造するためには、正確で遠大な理想を持たねばならないが、社会主義こそがその理想である。マルクスの科学的社会主義こそは、人間が人間を搾取し、圧迫する階級社会を消滅させることができる思想だという。また中国の現状にふれて、帝国主義国家と結託した軍閥、買弁資本の支配を打倒してこそ、中国社会は改造されると言い、最後に格調高い次のような言葉で講演を結んでいる。「青年学生は事物に対して鋭敏な感覚を持っている。丁度、湘江の水が上流に行けば行くほどに澄みきっており、下流に行けば行くほど混濁しているように、青年は上流にいて、頭脳は清澄で、いかなる汚濁したものの影響も受けてはならない。革命の理想を堅持し、旧勢力と闘争し、更に多くの人を団結させ、社会主義の遠大な理想のために奮闘すれば、社会主

義の理想は必ず実現できる」。

毛沢東が社会主義を「歴史的必然」や「プロレタリア階級の歴史的使命」といった観念性の強い「理論的」なものとしてではなく、もっと人間の精神を深くうつ、偉大な理想主義としてとらえていることは注目に価する。従って毛沢東にとっての社会主義運動とは、高い理想主義の精神を持つ人間を数多く養成していく事であった。人間としての自立の精神、独自の思考能力、人間の解放を目指して奮闘する理想主義の精神、このような諸条件を備えた人間を養成していく事が、毛沢東にとっては社会主義運動の展開であった。それは青白い議論を展開する知識人達とは全く違った、より人間的な社会主義であった。このような毛沢東の理想主義を、彼が党員養成機関として創設した湖南自修大学の構想の中にも、われわれは確認することができる[2]。

毛沢東はまずこの学校が「書院の形式をとり、現代学校の内容をおさめた」独自の性格を持つものだと規定する。そしてこの大学の持つ独自の方式と内容は次の五点にあるとする。第一は「自分で本を読み、自分で思索する」ことであり、第二は「共同討論、共同研究」、第三は教師の役割が知識の注入ではなく、学生の自修の援助にあること、第四は学科単位別であること。最後は自修大学の学生のあり方である。それは次のようなものである。「修学するだけではなく、向上の意思を持ち、健全な人格を養成し、良くない習慣を洗い流し、社会を革新する準備をしなければならない」。またこの大学が湖南人に対して持つ任務は「個人及び全体の特殊な個性と特殊な人格を、自分で完成し、自分で創造することにある」と言っている。

毛沢東にとっての社会主義社会とは、すべての人間を解放し、すべての人間を、このような自立的精神と、尊厳にあふれた人間とする社会の事であり、社会主義運動とは、このような自立と創造、理想主義の精神を持った人間が連帯して進める運動でなければならなかったのである。それこそが毛沢東がマルクス主義と社会主義運動に托した夢で

あった。自修大学が理論機関誌として創刊した「新時代」発刊の辞[3]は、このような毛沢東の姿勢を、格調高い言葉で語っている。「同人はすべて、独立自強の精神を持ち、堅忍不屈の気概を持っていることを信じている。ただ社会制度が悪く、教育機関が不備であることを痛感するために集り、この学問上の亡命の国を組織し、致用の学術の研究に努力し、社会改造の準備を実行するのである」

自修大学は党員養成を目的として設立されたものであったが、毛沢東がそれを決して社会から孤立させたものとしなかったことは、注目させられる。毛沢東は船山学社という公開の場所で、そこの毎月の経費四百元を利用してそれを運営しているのである。彼が長沙「大公報」紙上に「創立宣言」を発表して以後、その反響は湖南省のみならず全国に及び、蔡元培も「湖南自修大学の紹介と説明」という文章を「新教育」誌上に発表している[4]。一九二二年九月には、湖南人の一般的文化水準を考慮して補修学校を開設している。学生は最も多い時では二百名に達している。一九二三年に趙恒惕の弾圧に会い、同年十一月には湘江学校を開設し、自修大学の二百余名の学生はここに移っている。学生数の多さから見て、この自修大学は大きな成果をあげたと言うことができるであろう。

毛沢東の湖南での結党活動は、非常にユニークなものであるとともに、全国的にも最も成功したものの一つであった。

㈣初期の労働運動

一回大会の「決議」は、党の基本的任務を労働組合の組織化にあるとしていたが、湖南に帰った毛沢東は、この「決議」の方針に忠実に行動している。一回大会後に党は労働運動の総機関として中国労働組合書記部を組織するが、毛沢東は湖南支部の書記となっている。一九二二年十一月には湖南省労働組合総連合会が成立するが、毛沢東は総幹事

となる。湖南省労働運動の最高指導者である。そして毛沢東の指導する湖南省労働運動は、この時期に大いに高揚するのである。安源炭鉱、粤漢鉄道、水口山鉱山のストライキを初めとして、多くの業種にわたって十数回のストライキが組織され、大部分は勝利をおさめている。しかし、この湖南における労働運動の高揚は、一回大会が決定した方針―「現在存在するその他の政党に対しては、独立的で攻撃的な政策をとるべきである。……我々は始終完全に独立の立場に立って、ただ無産階級の利益を擁護するだけで、その他の党派とはいかなる関係も持つべきではない」(1)という、非常に純粋ではあるが孤立的である方針とは対極に立つ、毛沢東独自の運動論によるものであった。

毛沢東の労働運動は、労働者の組織化とともに、それが広い社会的支持を獲得することに力を注ぐものであった。毛沢東はまず労働者に、運動の持つ人間的「正しさ」を理解させて、労働者を組織する。次にはこの労働者運動の持つ道義性と、社会的正義を広く人々に訴えることによって、世論の支持を獲得する。そしてこの運動の持つ道義性と社会正義、世論の支持を背景として資本家と対決し、譲歩を引き出す、という性格の闘いであった。それは観念的な原則論を振り回す知識人達が遠く及ばないような、現実感覚にあふれた熟達した闘いであった。当時湖南労働運動は全国的にも最も高揚したものであったが、この事はこの毛沢東の指導と密接な関係にある。

毛沢東のこのような運動の方法を最初に確認できるのは、アナキストの労働運動指導者に対する態度においてである。当時の湖南労働運動を指導していたのは、黄愛、龐人銓という二人のアナキストであった。彼等は一九二〇年十一月に「湖南労働組合」を組織し、第一紡績工場を初めとして、いくつかのストライキを指導して、最盛期には四、五千人の労働者を組織するまでになっていた(2)。毛沢東はこの二人に対しては全く「攻撃的な政策」を対置していない。むしろ積極的に「団結」の態度をとっている。毛沢東は彼等の機関誌に執筆し、彼等の労働組合に対して「労働組合組織は、民主によって作られた全権機構を持たなければならない」等の三項目の意見を提出しているが、アナキスト

の側も毛沢東の意見を容れてすぐに組織を改組し、毛沢東に援助を要請している。そして彼等二人は、ついに一九二一年末には、社会主義者青年団に加入するのである。[3] その後この二人は第一紡績工場のストライキの中で、趙恒惕から逮捕、殺害されるが、毛沢東は彼等を追悼する運動を全国的に展開している。毛沢東の二人のアナキストに対する態度には、他党派に対する敵意や排除の意識は全く見られない。同じ目的を持つ人間への友情と連帯の態度で接しており、それが彼等を自己の側に吸収、同化するという結果となっているのである。

有名な安源炭鉱のストライキには、毛沢東は直接の関わりはそう深くはない。彼が安源炭鉱を直接訪れたのは、三度だけである。第一回は一九二一年十二月で、約一週間滞在し労働者とともに生活しながら調査している。第二回は一九二二年九月、あの有名なストライキの直前である。三度目はストライキ勝利後である。このように毛沢東が安源炭鉱に滞在した時間は短いが、湖南省労働運動の総指揮官として行った闘争の指導には、前述したような毛沢東の指導の特質を見ることができる。

第一回の訪問の後に補習学校、労働者倶楽部の設立、労働組合の組織等の方針を出し、李立三を現場の指導者とすることを決めているが、李立三の回想によると、その時毛沢東が与えた指示は次のようなものであったという。「我々が現在行っている労働運動は、必ず合法性を獲得しなければならない。まず穏やかな立場に立たねばならない。特に平民教育運動を利用して活動を進めねばならず、地方の比較的開明の人士と連絡をとり、地方政府を通して合法的地位を取得しなければならない」。[4] またストライキ直前に李立三宛に書いた手紙は『「哀兵は必ず勝つ」（悲しみ怒りを持った軍隊は必ず勝つ）の道理を説明し、人々の心をうつスローガンを提起し、正義の闘争であることを説き労働者を激励し、社会の広汎な同情をかちとり、敵を孤立させねばならない』という内容のものであった。[5] またデモ隊の人々が「中国共産党万歳」と叫んだ時には、毛沢東は皆に向って「我々の党は暫くの間公開することはできない。敵に対

する闘争は、大胆で細心であり、かつ勇気があり謀略がなければならない」といましめたという。[6] このように毛沢東の指導を見ていくと、実に慎重で細心、そして常に大衆性と道義性、合法性を重視したものであったことが解る。彼は決して原則を固持することで自分自身が孤立に陥るような、愚かな道はとらず、あくまでも世論の広い支持を得ることのできる運動を展開しているのである。安源炭鉱の闘争は勝利するが、この勝利には現場で交渉と指揮にあった李立三と劉小奇の見事な采配ぶりによることが大きい。しかし毛沢東の老練な指導ぶりも決して忘れてはならない。

この時代毛沢東は理髪労働者、印刷労働者、人力車夫といろんな業種で労働組合を組織し、実に精力的に活躍しているが、ここでは、その中から典型的な二つの事例のみをとりあげる。一つは長沙の建設労働者の闘争であり、もう一つは湖南省都督、趙恒惕への「説理闘争」である。長沙の建設労働者の闘争は、省政府が決めた賃金の日額に反対し、その値上げをかちとることを目的としたものであるが、毛沢東の採った闘争戦術は、一方ではストライキの正当性を訴える文章を長沙「大会報」紙上に発表して、世論を味方につける努力をしつつ、他方では趙恒惕が作った「省憲法」に依据しつつ、「営業の自由」を主張して、湖南省当局と交渉を行うという、実に柔軟性に富んだものであった。この間彼自身は、組合の規約を作り、ストライキ宣言を書き、デモに参加し、団体交渉の先頭に立つという具合に、獅子奮迅の活躍をしている。この闘争は完全な勝利をおさめている。このような一連の闘争を集約するものとして行われたのが、一九二二年十二月に三日間にわたって、趙恒惕との間で行われた「説理闘争」である。この闘争でとりあげられた項目は、十項目にも及ぶが、毛沢東がここで意図したものは、労働運動が獲得した成果を定着していくことであった。この目的は交渉を通して基本的に解決されている。[7]

これまで簡単に追ってきただけでも、毛沢東の労働運動の指導が、一回大会で決定した観念的な方針と全く異ったものであったことが解る。毛沢東の労働運動の展開の仕方は、労働者階級の立場や利益を守るという原則をうち出す

ことではなかった。彼はいつの場合にも、その運動の持つ人間的正当性を広く人々に訴えかける。そのためにジャーナリズム、有名人士、憲法等利用できるものはすべて利用する。そしていつも自分達の運動を「正義」の立場に置き、社会の多数の支持を得るものとする努力をしているのである。「正義」と「世論」の力によって、相手を道理において屈服させていく。毛沢東が獲得した勝利とは、そのような性質のものであった。湖南の労働運動は、毛沢東のこのような指導によって大いに成功し、高揚したのであった。

しかしながら、いかに戦術的に巧みに闘ったとしても、労働運動は退潮していかねばならなかった。一九二二年二月七日、呉佩孚の軍隊が鉄道労働者のストライキを銃剣で弾圧した「二七惨案」以後、中国に一時期高潮した労働運動は急速に退潮していく。湖南もこの全国的な労働運動退潮の波と無縁ではありえなかった。勝利した安源炭鉱の労働者の上にも弾圧の手は及んでくる。あらゆる所に弾圧は加えられる。このような情況の中で毛沢東は一九二三年四月、中共三回大会出席のために長沙を離れて広州へ出るのである。

労働者運動の中に輝かしい未来は準備されるはずであったし、毛沢東もそう信じて労働運動に挺身したのであるが、しかし、その結果は敗北であった。個々の闘争でいかに巧みに闘ったとしても、社会全体を動かす力にはなりえない。中国ではそれは社会的少数者の運動でしかありえず、中国社会を根本から変革する力は持ちえない。毛沢東は二年間にわたる労働運動の経験から、この事を直感したようである。張国燾の次の証言を、われわれは毛沢東のこの気持ちを伝えるものとして読むことができる。中共党三回大会における毛沢東の姿を張国燾は次のように書いている。「毛沢東は当時彭湃の活動については全く知る所がなかった。しかし彼は大会に対して指摘した。湖南労働者の数は少ない。国民党員と共産党員は更に少ないが、全国到る所にいるのは農民である。だから彼が出した結論は、いかなる革命でも農民問題が最も重要である、という事であった。彼は更に中国の歴代の造反と革命は、いつも農民暴動を主力

としていることで、それを証明しようとした。中国国民党が広東に基礎があるとするならば、是非農民の軍隊を組織しなければならない。もし中共も農民運動を重視するならば、農民を動員しなければ、広東のような形勢を作り出すことは難しい」。[8]

この張国燾の証言は、毛沢東のその後の行動と照らして信を置くことができる。彼はこれ以後再び労働運動に復帰することはない。そしてコミンテルンの都市革命路線に対しても、一貫して冷淡である。毛沢東が二年間にわたる労働運動の経験で、中国革命に対して持つ、それの非力さを直感した事は間違いない。しかし、この時代この直感は理論化されていないし、ましてやマルクス主義に対する批判や懐疑の形をとってはいない。だが毛沢東のその後の行動を導く精神の基調となった事だけは疑うことができない。

マルクス主義への固い信念を持ち、他方ではその労働者運動路線の中国での無力さを直観している毛沢東は、三回大会を直前にした広州へと出てくる。そしてそこで初めて世界的マルクス主義運動の指導機関コミンテルンの指導する「マルクス主義運動」と出会うのである。彼がこの時代、コミンテルンに批判や反発を持っていた形跡は全くない。ロシア革命を唯一の道だと信じていた毛沢東は、その指導を絶対的に信頼していた、と考える方が自然であろう。事実毛沢東は、コミンテルンの指導する国共合作路線に、限りなく忠実である。しかし、この経験がまた次の毛沢東を準備することになるのである。ここで少し毛沢東を離れて、われわれはコミンテルンの運動とその中国革命路線—国共合作について考察しておかねばならない。

第二節　コミンテルンの運動と国共合作路線

(一)コミンテルンの中国への着目

ロシア革命は一国のみで生き続けることはできない、ロシア革命を救う道はただ一つ、ヨーロッパ革命であり、その展開としてある世界革命である、というのはレーニンやトロッキー等ロシア革命の指導者に共通した認識であった。そして彼等はその日は近い、と確信していた。一九一九年四月二十日に出したコミンテルン執行委員会のメーデー宣言は、高らかに「一年を経る前に、全ヨーロッパはソヴィエットとなるだろう。あらゆる国で、労働者は決定的な瞬間が来たことを知った。……一九一九年に大共産主義インターナショナルが生まれた。一九二〇年には、大国際ソヴィエット共和国が出現するであろう」[1]と楽観的に断言している。コミンテルンとは、ロシア共産党を中心として世界の共産党を結集して、このような世界革命を実現するための指導機関として一九一九年三月、モスクワにおいて結成されたものである。世界最初のプロレタリア革命を実行したというロシア共産党の圧倒的な権威と、この革命が人々の胸にもたらした世界革命への大きな希望とが、このコミンテルン運動を支える二本の精神的支柱であった。

世界史の現実は、しかしながらコミンテルンの予測のようには推移しなかった。一九二〇年三月のドイツのカップ一揆の失敗をもって、ヨーロッパ革命の希望はついえ去る。こうしてロシア革命が生残りの道として注目したのが、東方の植民地、半植民地の民族運動であった。コミンテルンは一九二〇年七月に開催された第二回大会で「民族および植民地問題にかんするテーゼ」を採択し、二一年十一月には「第一回極東民族大会」を開催している。東方の中でも特にコミンテルンが注目したのが中国である。コミンテルンが中国に共産党を組織する準備工作としてボイチンスキーを派遣したのは、一九二〇年春であり、この時彼は北京で李大釗、上海で陳独秀と会見している。中国でもロシ

ア革命に中国の出路を見出した知識青年が各地に散在しており、ボイチンスキーの来華は、彼等の間に共産党結党の気運を高めるのである。一年余りの準備期間を経て中共党は結党される事になるが、この時コミンテルンは代表マーリンと赤色労働組合インター代表のニコンスキーを派遣し、援助している。中共党結党後の初期の活動は、思想的にも資金的にも、殆んどコミンテルンの援助に依拠するものであった。一九二一年七月の二回大会において中共党は、コミンテルンへの加入を決議し、コミンテルン中国支部となり、組織的にもコミンテルンの指導下に入る。当然の事として中国の共産主義運動は、思想的にも組織的にもコミンテルンの強い影響を受け、それと同質の運動となるのである。そしてこのコミンテルンが、中国革命の路線として提起したのが、外ならぬ国共両党の党内合作方式による「国共合作」であった。

中国共産党内にはこのコミンテルン路線には、強い反対があった事は様々な人々の証言が一致して認める所である。[2] しかし、中国党はコミンテルン代表マーリンの協力な指導の下に、三回大会で国共合作を党の路線として採択することを決定し、国共合作へ踏み出すのである。しかしこの「国共合作」という政治路線は、矛盾に満ちた独善的な、政治的策略と言うにふさわしい政治路線であった。当然の事として、それは様々な問題を惹起することになるが、それらの具体的な問題をとりあげる前に、われわれはこの政治路線の本質を、それが形成される経過を踏まえながら、まず原理的に考察しておかねばならないであろう。

(二)国共合作路線の政治的性格

コミンテルン運動の核にあるのは、絶対的な「党派性」の主張であった。プロレタリア階級のみが人類を救済する共産主義社会の創造という偉大な歴史的任務を担い、この階級を代表する党派が「共産党」であるならば、共産党こ

そは人類の未来を代表する唯一絶対の党派ということになる。コミンテルン運動における「党派性」の主張とは、このような論理によるものであった。従ってコミンテルンは他党派、特に社民党などの類似の党派に対しては、絶対的な否定の態度をとった。

この独善的で非寛容な運動は、植民地半植民地に自己の運動を拡大しようとした時に、解決不能な矛盾に逢着せねばならなかった。中国を初めとする東方の諸国では資本主義が未発達であり、労働者階級と呼べるものが存在せず、従って労働者階級を政治的に代表する共産党も、存在できないか、或いは存在しても弱体なものとしてしか存在していないかである。この問題はコミンテルンのよって立つ世界観の立場からすれば、本来は解決不能の矛盾である。しかしこの解決不能と思われる問題を解決するために案出されたのが、「合作」という政治路線であり、共産党の「二重の任務」というテーゼであった。

コミンテルンは植民地、半植民地においても、自己の党派性のテーゼを決して放棄してはいない。コミンテルンの「テーゼ」は、植民地、半植民地においても「プロレタリアートは革命の闘争の手段によってのみ、かつブルジョアジーを打倒した後でのみ、初めて真の民族的自由と統一とを獲得しうるのである」(1)と主張する。だが残念な事に植民地国家には、革命を遂行しうる程の力を持つプロレタリアートは存在しない。強力な政治的力量を持って存在するのは、ブルジョア階級の民族主義政党だけである。そこでコミンテルンは植民地、半植民地における共産党に対して、これら民族主義政党との「合作」による民族独立闘争の遂行という政治課題を提起する。しかし、この政治課題は、それだけに完結するとすれば、共産党はこの政治闘争の中に埋没してしまい、コミンテルン運動そのものを否定するという結果になる危険性を持つ。そこでコミンテルンが植民地、半植民地諸国における共産党に提起したのが、「二重の任務」というテーゼである。それは次のようなものである。

植民地および半植民地諸国の共産主義労働者党は、二重の任務をもっている。すなわちこれらの各党は、政治的独立の獲得を目指すブルジョア民主々義革命の任務をできるだけ早急に果たすために闘うとともに、他方では独自の階級的利害を守る闘争のために労働者、農民大衆を組織し、これによって民族主義的ブルジョア民主々義陣営の諸矛盾を巧みに利用するのである。(2)

このコミンテルンの植民地、半植民地諸国の共産党の「二重の任務」という「テーゼ」が主張していることは、民族独立という共同の目的に対しては共同して戦うが、その中においても、絶対に自己の党派的利害は忘れてはならぬという事である。しかしわれわれは、ここに人間世界の基本的道徳をも無視した、破廉恥なエゴイズムが顔を出していることを見逃してはならないであろう。共同の目的の下に、共同して闘っている同志達の足下を見て、そこにある「諸矛盾を巧みに利用」して私利を図る、というような行為は、人間社会においては、決して許さるべきものではない。それは道徳的に断罪される最も恥ずべき行為の一つなのである。しかしながらコミンテルンは、この種の「低次元な道徳」から自己免罪している事も、われわれは忘れてはならない。なぜならば、コミンテルンは人類解放という崇高な事業に邁進している運動体であり、この偉大な目的のためには、小さな道徳的罪など当然免罪されるべきものであるからである。

しかしこのコミンテルンの自己意識は、自分自身がそう確信するだけの事であって、決してそれは証明されたものでも、確実な根拠を持つものでもないのである。そうである限り、コミンテルンのこの種の指示は独善以上のものでは決してありえない。自己を一種の超越者として、この世界のあらゆる規範から解放されており、自己にはすべての事が許されていると確信する独善である。そこではエゴイズムも、道徳的破廉恥もすべての行為が、崇高な目的の下で免罪されるのである。このコミンテルンの独善的で偽善に満ちた自己意識によって構成された一つの政治路線が、

中国における「国共合作」路線であった。

コミンテルンの中国共産党に対する「指示」[3]は言う。中国においては「労働者階級が、完全に独立の社会的勢力としてはまだ充分に分化していない」。従って「国民党と若い中国共産党との行動の調整が必要である」。がその調整の形式は「現在の条件下においては、中国共産党員が国民党内にとどまるのが適当である」。このようにコミンテルンの指示は、国共両党の党内合作という、全く党派性の主張を忘れたかの如き内容の事を主張しながら、他方ではそれと全く矛盾する次のような主張をつけ加える。「党は中央集権機構を伴う固有の組織を保持しなければならない。……中国共産党は、独自の旗の下に、またあらゆる政治グループから独立して活動しなければならない」云々。そして最後には蛇足としか言いようのない、次のような言葉もつけ加えている。「そのさい民族革命運動との衝突を避けるべきである」。

このコミンテルンの指示ほどに、矛盾に満ちた独善的な内容の文章は少ないであろう。それは「人間は飛ばなければならないが、地上から離れてはならない」と言うに等しいものであった。党派的独立性の維持と党内合作の維持、そして決裂の回避、この三つの相矛盾する課題を何のトラブルも起さず、成功的に遂行するなどという事は、到底不可能な事であった。絶対的な党派性の主張を基本として、その可能性が全く存在しない所において、それを貫徹させていこうという無理が、このような矛盾に満ちた「政治的作文」を生んだのであるが、この任務を成功的にやりとげるためには、相手の「諸矛盾を巧みに利用する」といった類の政治的策略や欺瞞、駆引きといった手段を駆使する以外にはないであろう。コミンテルンの指示する国共合作という政治路線そのものの中に、政治的トラブルを惹起せずにはおかぬ要因は内包されていたのである。以後相つぐ政治的トラブルは、コミンテルンの政治路線の内包する矛盾の必然的展開であったと考えねばならない。

このように矛盾と欺瞞に満ちた、政治的策略にしか過ぎない政治路線であったが、中国においては「国共合作」は成立する。そしてそれは巨大な政治的インパクトを中国に与えることになるのである。そのような事が起りえたのは、またそれなりの事情が中国には存在したからであった。

(三)国共合作の形成

国共合作が成立するには、国共両党ともにそれを必要とする理由があった。国民党にとって魅力的であったのは、中共党の背後にあるソビエト国家の軍事力と資金であった。それこそは辛亥革命後、孫文が諸列強に期待し、援助獲得に失敗した当のものであったからである。そして孫文は、また失敗に終った辛亥革命に比して、見事に革命を成功させたレーニンの政治的力量に対して、尊敬の気持ちを深くしていた。孫文を特に感激させたのは、ボルシェヴィキ党の党組織論である。この訓練された中央集権的党組織に比して、国民党の党組織は、あまりにも組織的に軟弱であった。孫文はボルシェヴィキ党に倣った、国民党改組の気持ちも強くしつつあった[1]。同時に孫文はロシア革命の中に、自らの三民主義の理念と共通する多くの部分を発見し、ロシア革命そのものへの共感を深めていた[2]。

このような状態にある孫文に対して、ソビエト国家が「合作」の打診を行ってきたのである。「連ソ容共」の政治路線の代償として、ソビエト国家は巨大な軍事援助と資金援助とを約束し、実行した。一九二三年三月にはソ連政府は二百万ルーブルの財政援助を提供するとともに、軍事顧問団を派遣を約束している。その後ソビエトは黄浦軍官学校の創立を援助すると共に、引続き武器、資金の援助を続けている。

孫文はコミンテルン代表マーリンとの会談で、「連ソ容共」の政策への転換を決意し、「国共合作」に基本的に同意するが、しかし国共両党の対等な関係には反対する。この孫文の強硬な態度に対するコミンテルン代表マーリンの妥

協案が国共両党の「党内合作」という方式であった。この方式による合作に対する国民党内からの反対に対しては、孫文は中共党が「もしわが党に従属しなければ、私もこれを必ず切り棄てる積もりである」(4)と言って説得している。孫文は国共合作は、自己の指導下に運営できるという強い自信の下に、この政治協定に踏みきったのである。この際孫文はロシア革命でしめされたボルシェヴィキ党の組織力と行動力と同様のものを、中共党に期待していた。その事は国民党組織と活動力の強化につながると考えていたのである。

一方中共党の側にも、国共合作を受け容れる条件は存在していた。呉佩孚による京漢鉄道組合の弾圧「二七惨案」以後、一時高揚した労働運動は各地で弾圧にさらされ、大きく退潮しつつあり、このような情勢に対して中共党は悲観的になりつつあった。陳独秀は「二七惨案」直後の一九二三年四月十八日、「響導週報」に軍閥と闘う事への苦渋をにじませた、「どのように軍閥を打倒するか」(5)という文章を発表している。この中で陳独秀は軍閥を打倒するためには「全国の各階級、各党派、各分野の諸勢力」を結集して「広範な国民運動」を組織しなければならないと主張しつつ、その具体的な方法として「民主革命的中国国民党の周囲に結集」することを提案している。この陳独秀の文章は、当時の中共党中央を支配していた空気を表現している。この文章は一九二二年八月西湖における中共党中央委員会でマーリンによって提案された国共合作を、中共党が主体的に受け容れていく過程を説明している。

中共党はマーリンのコミンテルンの組織原則による、強引とも思える指導に従ったという面のみでなく、自己の主体的力量の評価、自己をとりまく客観情勢の評価から、コミンテルンの提案を主体的に受け容れた、という面も確かに存在するのである。しかし、中共党のこの選択は、決して国民党に対する無条件服従を意味するものでなかったのは当然である。そこには厳然としてコミンテルンの指示する、「党派性」の原則が貫いていた。この党派的意図は、劉仁静のコミンテルン第四回大会における報告が、この上なく率直に表明している。劉仁静はこの報告の中で共産党員

の国民党への個人加入という統一戦線の形態が、共産党の活動領域を拡大するものであることを強調しつつ、最後に「われわれは、大衆をわれわれのまわりに集め、国民党を分裂させることができるのである」と結ぶのである。

この劉仁静の報告ほどに、率直に国共合作に対する中共党の意図を表現したものはない。この報告は国共合作に対する中共党の意図が、この政治協定を通して当面の困難をしのぎ、将来の権力獲得に備えることにあることをしめしている。そこに厳然として存在しているのは、国民党を自己の勢力拡大のために「利用」していこうという、非情な党派的エゴイズムである。先に見たように、孫文にも強い党派性は存在していた。政党であるからには党派性がつきまとうことは宿命であるが、孫文の党派性は、自己の党派性を明確にして、それに服従を要求するという単純な性質のものであった。この孫文の党派性に比して中共党のそれは、他党の内部に入り、他党の内部で自己の勢力を拡大しようというのであるから、もっと陰濕で欺瞞的性格が強いものと言わざるを得ない。このような精神的基盤の上に成立した政治協定であるから、それがスムーズに運営されるはずはない。その内部で陰謀や駆引がくり返されるのは、必然の結果であった。

包恵僧はその回想の中で、自分が体験した国共合作の現場の様子を次のように書いている。「国民党員は共産党員に対して防衛の姿勢をとり、分業合作の精神はなかった。彼等は少ししか仕事をさせないか、或いは全く仕事をさせなかった。共産党に活動発展の機会を与えなかった。共産党の方は、譲歩の態度を採り、合作の重要性を強調し、闘争の必要を軽視した」[7]。相互不信が支配する現場の様子が目に浮かぶような文章である。またハロルド、アイザックは国共合作の内部を次のように書いている。「当時、国民党組織のなかには著名な共産党員が数名中央執行委員会のメンバーとして活動していた。しかしだれひとり党書記局内の地位を獲得することは許されなかった。軍事委員会は多くのロシア人技術顧問をつかっており、また軍の政治局には、たいていのところは共産党員がきりまわしていたが、しか

し軍の総参謀部と財政部は、共産党員は厳重に除外していた」。[5]

国民党がこのように共産党員を警戒するのは、国民党の立場からすれば当然の対応であった。国民党の立場からすれば、国民革命の発展よりも、自己の党の存続そのものの方が重大だからである。国民革命の発展とともに、自分自身の党が共産党に支配されるようになり、自分達が追い出されるようになるのであれば、共産党と国民革命の動向に警戒するのは当然である。国民党は共産党員に対する警戒感と統制とを強めていく。このような国民党の強い統制下にあっても、共産党は国民革命の中で飛躍的に勢力を拡大していく。労働運動においても、農民運動においても、共産党の勢力は非常な勢で拡大していく。このような共産党勢力の拡大は、国民党内の警戒心を一層強め、公然たる共産党排除の動きが起ってくる。所謂「右派」と呼ばれる人々の動きである。

右派を代表する人物は戴季陶であるが、彼は一九二五年八月「孫文主義の哲学的基礎」を発表し、中共党と相容れぬ国民党の思想的基礎を明らかにする。そして同年十一月には、所謂「右派」の政治団体である「西山会議派」を結成するのである。国民党右派の活動が活発化し、国民党内における共産党排除の動きが強くなると、中共党は分裂回避に全力を集中することになる。「左派と結び、中間派を獲得し、右派を孤立させる」というのが、その戦略である。その戦略に従って大衆運動にも一定の枠が課せられることになる。しかしこの国民党内の共産党排除の動向は、政治的術策で乗りきることのできるような底の浅い性質の問題ではなかった。それはより深く、政党と政治の本質に根ざすものであった。

一九二七年四月十二日の蔣介石の軍隊による上海の労働者大殺戮に始る反革命クーデターは、無理に彌縫された政治劇の悲劇的終末であった。政党がある種の社会的利害を政治的に代表し、その実現のために活動する集団である以上、自己の胎内を利用しつつ、全く異る政治的利害を追求する集団の活動を長期間にわたって放置しておくことは不

可能である。就中その集団は国民革命という民族的課題を利用して自己の勢力を拡大し、「大衆をわれわれのまわりに集め、国民党を分裂させる」という自己に敵対する意図を明らかにしている集団である。政党の自己防衛本能からして、このような「内部に居る敵対集団」を弾圧するのは必然の帰結である。国民党のクーデターとは、このような政党の自己防衛行為として理解されねばならない。

このような国民党の自己防衛的行動を前にして、その危機が切迫している直前まで、コミンテルン指導部は独善的な手前勝手な夢想に耽っていたという事実は、われわれはしっかりと歴史の記憶に刻みこんでおかねばならないであろう。一九二七年三月、コミンテルン最高指導者スターリンは、モスクワ地区組織の活動家三千人を前にして、トロツキー派の「右派国民党と手を切れ！」という意見に反論しつつ、「右派を最後まで利用し、レモンのように搾り出し、それを投げすてなければならない」と演説しているのである。[9] 歴史は皮肉にも自分が「投げすてる」前に、自分の方が「投げすて」られたのであるが、ここに表現されているのは、自己の行為はすべてが免罪されるべきだという一種の超越性に立つ意識の腐敗であろう。自己の行動はすべてが「正しく」、許容されねばならぬと信じる意識には、他の人間の人間としての当然の行動までが見えなくなっているのである。そしてひたすら独善的に自己の目的を、手段と方法を問わず追求していく。このような意識の腐敗現象が、コミンテルン指導下の中国共産党の運動には、その後も一貫してつきまとっている。

毛沢東が理想実現の運動だと確信して身を投じた運動とは、この様な性質のものであった。しかし、毛沢東は運動の初期においては、その事は全く意識していないようである。

第三節　第一次国共合作下の毛沢東

㈠国共合作への態度

コミンテルンの運動は、マルクス主義の世界観に基づく世界革命を目指すイデオロギーの運動であり、その核心にあるのは党派性の主張であった。それは世界革命を遂行する、堅固なる党の建設と、その組織的、イデオロギー的影響の拡大を目的とした運動であった。このイデオロギーと党派性を生命とする運動体が、中国において「国共合作」と言う、言わば大衆路線的政策を提起したのは、半植民地国家という中国の後進的社会構造を考慮して、そこにおいて自己の政治的意図を貫徹するための手段、あるいは方便としてであった。従ってこの政策には、相手の「諸矛盾を巧みに利用する」とか「レモンのように搾り出し、それを投げすて」るとかといった策略的、陰謀的な色彩がつきまとったのである。

毛沢東の革命運動に対する考え方や姿勢は、このコミンテルンの運動とは、明らかに異質であった。彼の革命に対する出発点は、中国社会を何としても変革し、民族と国家の救済を実現しなければならないとする信念であった。この目的を実現するための方法として、彼はマルクス主義の世界観を選択するが、しかし、彼は自己の運動を決して世界革命を目指すイデオロギー的運動として組織するようなことはしなかった。毛沢東の運動に対する態度は、観念的イデオロギー論者としてのそれではなく、あくまでも堅実な実践者としてのそれであった。毛沢東にとって問題であったのは、運動がイデオロギー的に「正しい」かどうかという事ではなく、運動が目指した目標に対して実際的成果をおさめうるかどうかという事であった。運動を成功させるために毛沢東が最も大切にしたのは、運動の大衆性、それが広く人々と社会の支持を獲得できるかどうかという事であった。運動の持つ「道義性」を高く掲げ、知名人士の

支持を集め、法律等の一切の合法的に利用できるものはすべて利用し、世論を動かすことによって相手を追いつめていくというのが、これまで毛沢東が採ってきた闘争の手法であった。このような毛沢東の実践者としての感覚と手法は、イデオロギーと党派性を正面に据えたコミンテルンの運動とは、明らかに異質なものであった。毛沢東が中共党一回大会で違和感を感じた張国燾を先頭とする知識人青年達こそは、コミンテルンの正当な嫡子であったのである。

しかしながら毛沢東は、自己と全く異った体質のコミンテルンが指導する、国共合作という政治路線に対してこの上なく忠実である。彼は全力をつくしてこの運動のために献身している。それはこの政治路線が策略的部分として持つ大衆性に対して、毛沢東が強く共感したからである。中共党はコミンテルンの指令にそいつつ「連合戦線」という政治路線を明らかにしていく。一九二二年に開かれた中共二回大会は「民主的連合戦線に関する決議」(1)を採択し、「民主的連合戦線」を形成するための三つの段階を提起する。そしてこの翌年の一九二三年七月の三回大会においては、「国民運動と国民党問題に関する決議」(2)を採択し、党内合作による国共合作を決定する。この決議では国民革命が中国での基本的課題であることを規定し、「中国国民党は国民革命の中心勢力でなければならず、国民革命の領袖の地位に立たねばならない」と規定するのである。毛沢東が強く共感したのは、中国社会の各階層を結集した「国民革命」の遂行というテーゼである。このテーゼは彼がこれまで追求してきた運動と性格を同じくする。毛沢東は全力をあげて国共合作の運動に没入していくのである。このような毛沢東の態度は、彼がこの時代に書いた論文によく表われている。

毛沢東は一九二三年四月に「外力、軍閥と革命」(3)という題の論文を「新時代」誌上に発表しているが、この論文の主張は軍閥に対する国民党、共産党、非革命的民主派の大連合の形成という事にある。毛沢東は「最急進の共産派と穏健な研究会系知識派、商人派が共同の敵を打倒するために国民党と合作して大民主派を形成」して「軍閥」と対峙

する。このような対峙が十年前後にわたって続くかもしれぬが「結果は民主派が軍閥派に勝利する。中国の民主独立政治はこの時に完成する」と主張している。また一九二三年七月、三回大会直後に「響導周報」に発表した「北京政変と商人」(4)の主張も、同様に連合戦線の形成ということにある。毛沢東は軍閥と帝国主義を打倒する、国民革命こそが中国国民の歴史的使命であることを強調して、「全国国民の中の商人、労働者、農民、学生、教職員は誰もがこの革命工作の一部を担わねばならない」と主張している。

このようにこの時代の毛沢東の活動は、国民革命に向けての中国社会の各階層の「連合戦線」の形成に集中されている。社会の各階層を結集することで国民の多数派を形成するという運動は、毛沢東のこれまでの運動と性質を同じくするもので、彼にとっては心から同感できたと考えられる。加うるにこの時代は、湖南における労働運動の敗北を経験した直後である。毛沢東の意識に重くのしかかっていたのは、労働者階級という中国社会では圧倒的少数者の運動への反省であった。それだけに彼には社会的多数派を形成する運動への想いは強かったのである。このような毛沢東が、国民革命に向けての連合戦線という運動に全力を傾注するようになったとしても、それは決して不思議ではない。毛沢東にとっては、必然の選択であったのである。しかし、このような毛沢東の選択は、当時の中共党総書記、後に「右翼日和見主義者」として批判されるようになる陳独秀の政治路線そのものを選択し、それと合一することであったのである。

中共三回大会の主要な議題は国共合作問題であり、そこでは烈しく賛成派と反対派が対立し合った。反対派の立役者は張国燾である。彼の主張は次の三点に要約できるものである。(1)中共党は国民革命運動の中でも労働者の組織を独自に進めるべきである。(2)労働者の党員は必要な者以外は国民党に加入すべきではない。(3)大量の労働者を国民党に加入させる政策はとるべきではない。(5)コミンテルン正統派そのままの強い党派性の立場に立った主張である。賛成

派はこの党派性を弱めて国共合作を遂行することに重点を置いている。それは「決議」が「我々は国民党組織を全中国に拡大し、全中国の革命分子を国民党に集中し、現在の中国国民革命の必要に応えさせねばならない」(6)と言うように、すべての運動を「国民党」の中に解消していく傾向を強く持つものであった。

この両派の対立の間にあって、張国燾の言う所によると、毛沢東は最初は張の修正案に賛成していたが、修正案が否決されると「軽やかな語調で大会の多数の決定を受けいれることを表明した」(7)という事であるが、この証言は必ずしも全面的に信を置くことはできない。毛沢東のそれまでの思考は、張のようにイデオロギーと党派性の強い性質のものではなく、もっと実際の運動家としての性質のものであったからである。それにこの大会では、毛沢東は前掲の「国共合作」の「決議案」の起草者である。そして大会後には一躍中共党の最高指導部の一員に躍進している。このような事実は、毛沢東が国共合作の積極的推進者であったことを物語っている。

大会において毛沢東は九名の中央委員、五名の中央局委員の一人に選出されただけではなく、中央執行委員会秘書という要職に就いている。中央執行委員会秘書とは「秘書は本党内外の文書通信、開会記録の責任を負い、併せて本党の文件を管理する。本党のすべての書信には、委員長と秘書が署名せねばならない」「執行委員会のすべての会議は委員長と秘書によって召集され、会議の日程が附加されていなければならない」(8)と規定される、委員長とともに党の中枢に位置する要職である。まさに委員長の片腕とも言うべき職務である。毛沢東がこのような要職に抜擢されたのは、委員長陳独秀の意向なくしてはありえない事である。毛沢東は陳独秀の強力な支持者であり、積極的な協力者であったのである。

陳独秀は後には「すべての工作を国民党に集中せよ」と主張したと批判されるようになるが、この時代の陳独秀の政治的立場は、疑いもなく国民党を活動の中心に据えるものであった。それは陳独秀個人の立場と言うよりは、中共

党そのものの立場であったからである。中共党は三回大会宣言で「中国国民党は国民革命の中心勢力であって、言うまでもなく国民革命の指導的地位に立たねばならない」(9)と宣言している。この政治的立場を陳独秀は忠実に実践したのであるが、それは同時に当時の毛沢東の政治的立場であった事も、われわれは忘れてはならないであろう。当時の毛沢東は、陳独秀の忠実な政治的助手として国民党を中心とした国民革命の推進に挺身しているのである。このような毛沢東の姿を新民学会時代からの友人羅章竜の回想は、よく伝えている。羅は次のように書いている。「統一戦線の問題で、当時そんなに大きな力を払う必要はないと言う人がいた。毛主席は我々は真剣に対処しなければならず、彼等をあなどってはならない。合作の大事、小事はすべてやらねばならない。すべての会には参加しなければならない、頭を使って両党の合作を立派にやりとげねばならないと言った。」(10)

当時の国共合作に対する政治的態度においては、国民革命の指導政党として国民党に活動に集中する点では、陳独秀と毛沢東は同一の立場に立っていた。従って両者の間に緊密な政治的協力関係が成立したのである。しかし、この時代には未だ明確に姿を表わしていないが、そこに向う人間的態度が異質であったことは見逃してはならない。陳独秀のそれは中国社会の社会科学的分析に依拠して、観念として言わば受身の態度で受容れた。これに対して毛沢東は運動家の感覚から、そこに運動の大いなる可能性があることを直観して積極的に選びとったのである。政治的選択の結果としては同一であっても、ここにある相違は人間的には根本的なものであった。この両者にある人間的相違は後に大いなる政治的分岐となって現象してくることになるのである。

(二)国共合作下での活動

第一次国共合作前後の毛沢東の活動は、国民党を改造、再編することで、国民革命の課題を担いうる政党に再生さ

せようとする目的に集中している。その活動は国民党の中に埋没していたと言っても決して過言ではない。毛沢東は現在の最高の民族的課題である国民革命を遂行するためには、国民党の革命政党としての再生こそが鍵であることを確信して、この活動に全力をつくしているのである。

毛沢東の国民党における活動は、既に国共合作の成立以前の一九二三年九月から始っている。彼は中共中央と国民党総務部の委任を受け、湖南における国民党支部の組織にとりかかっている。この行動に対する毛沢東の構想は、国民党総務部長彭素民と副部長共産党員林伯渠に宛てた手紙に見ることができるが[1]、それは三段階から成るものである。第一段階が長沙支部の結成、第二段階が常徳、衡州及びその他の可能な場所での結成、第三段階が湖南総支部の結成である。この後に三民主義を信じ、活動能力を持つ人を集めて入党させ、成立大会を開いて支部長を選出し、本部に批准を求めるというのである。国民党湖南支部結成は順調に進み、十月には長沙支部、翌年三月には寧郷、安源支部が成立している。この時点では党員二六〇人である。二五年五月には湖南支部が正式に成立している[2]。

一九二四年一月に開催された国民党第一回全国大会は、国民党を改組し、国共合作を決定する画期的な意義を持つ大会であったが、毛沢東は代議員の一人として出席している。張国燾の言う所によれば、毛沢東は季大劉とともに、この大会では最も活躍した人物の一人である[3]。大会記録によると毛沢東のいくつかの発言が残っている。国共合作反対の動議の討論の中止、採決を提案したこと、比例選挙制の提案に対して革命党には有害であると反対したこと、研究会設立の提案に対して、研究と実行を分離すべきではないと反対したことが、毛沢東がこの大会でした主な発言である[4]。この大会での毛沢東の活躍は孫文の注目する所となり、彼は孫文の直接指名で、大会後には国民党中央執行委員会候補委員に任命されている。

毛沢東の国民党内での最初の活動として注目されるのは、一九二四年二月、国民党中央執行委員会第四回会議にお

ける四項目の提案である。[5] その内容は次のようなものである。第一項目は「重要な市県党部及び区党部には経費の補助があるべきだとする提案」である。党活動を支えているのは下部の機関であり、ここでの活動がなければ、党は必ず力を失うに至る。この下部組織の活動を支えるためには、下部組織へ経費を補助する事が重要である、と毛沢東は主張しているのである。第二項の提案は「本年内は各省の省党部は所在地の市党部を兼任すべきであるし、中央及び各地の執行部は、所在地の特別区の党部を兼任すべきであるとする」提案である。この提案は、いったん成立した組織が大衆から離れていかないために、日常的な仕事に取組むべきことを主張したものである。第三項目は「中央委員委員会及び各地の執行部は、実際の組織工作において、事実上の必要に注意せねばならないという提案」である。これは乏しい人材を上部に集めるべきではない、という主張である。第四項目は「本年は地方組織に軽重緩急の差をつけて計画案を立てるべきだとする提案」である。これは地域の重要度に応じて組織活動を進めるべきで、今年は北京、上海等の八ケ所に人材と資金を集中すべきだとしている。

毛沢東のこの四項目の提案は、二項が否定された以外、一項は予算委員会に回され、三、四項は中央委員会の参考として扱われるということで処理されている。毛沢東の提案が国民党内で実際に効果があったとは考えられないが、この四項目の提案からは、毛沢東が国民党にかけた期待と彼自身の意気込みの大きさを感じとることができる。毛沢東は国民党を大衆と一体となって、大衆の中で活動する、真の「国民政党」へと脱皮させるために、組織上の種々の改革を真剣に考え、提案しているのである。残念な事には、国民党組織は毛沢東の提案には、それ程真剣には対応しなかったようである。

国民党一回大会終了後、毛沢東はすぐに国民党上海執行部に派遣される事になる。国民党上海執行部は、国民党の大物がずらりと要職をしめる、国民党の中枢部であった。胡漢民が部長と組織部長を兼任し、汪精衛が宣伝部長、そ

の他の部長には于右任、葉楚倫、茅祖権等の名が並んでいる。これら国民党員の部長の下で、若い共産党員が執行委員として働いたが、そのメンバーには沈沢民、邵子力、瞿秋白、蔡和森、羅章龍、向警予がいた。毛沢東も言うまでもなく、その一人であった。彼は胡漢民を補佐する組織部秘書であったが、実質的には組織部の仕事は全部担当していた。この組織部で毛沢東が最初に取組んだ仕事が、国民党員の再登録であった。

一回大会によって改組を決定する前の国民党は、組織的には非常にルーズな政党であった。党員はいろんな階層の人から成っており、それぞれの人が党に対して持った思惑も様々であった。到底国民革命という大課題を担いきる実質は備えていなかったのである。毛沢東が着手した党員再登録という仕事は、このようなルーズな政党を革命党として再生させるという事であった。この再登録の原則となったのは、「国民党第一回全国代表大会の決議を理解し、賛成し、受入れ、党の規律に絶対に服従し、併せて入党後は物質的にも、自己の生命も、精神的には個人の自由も、すべて犠牲にしてこそ、国民党員となることができる」[6]という厳格きわまりない規定である。共産党員の資格を彷彿させるような規定であるが、この規定を読むと、少くとも国民党改組が、革命政党への脱皮を目指したものであったことが理解できる。毛沢東は誠実に、厳格にこの仕事にとりかかるのである。

毛沢東のこの仕事に対して、老国民党員から抵抗があるのは当然である。組織部にはどなりこんで来る人間もいたし、上海第四区の国民党成立大会では、指導権の奪回を目指す政客達が、騒乱を起こそうとさえしている[7]。そのような反対派の策動にもめげず、毛沢東は仕事を進め、三月には上海に十ヵ所の区分区を成立させ、同じく三月には浙江省党部、五月には江蘇省臨時党部、夏には江西省臨時党部を成立させ、着々と組織の整備を進めていく[8]。

このように国民党を革命党として再組織するという仕事を進める一方で、毛沢東等共産党員は、大衆組織化へも乗り出している。三月三日上海執行部第二回会議において、「平民教育運動委員会」の組織化を決定しているし、「婦女

運動委員会」「青年委員会」が続いて成立し、平民学校、労働者夜学校の開設へと発展していっている。[9] 青年共産党員は、これら大衆組織の中で活躍し、共産党の影響力を拡大していく。毛沢東も楊開慧も、この時代は夜学校の教師として活動している。

毛沢東等共産党員による、国民党の厳格な組織的整備と、彼等の無産大衆の啓蒙、組織化の運動は当然のこととして、これまでの国民党員達の警戒心を強める。ここで国民党「右派」と呼ばれる人々と、共産党員達の軋轢と葛藤が強まっていくのである。そしてこの両派の闘争において、共産党は決定的に敗北する。この闘争の分岐点となったのは、国民党左派の指導者汪精衛が組織部長を戴季陶と交替し、上海を去った事であった。国民党上海執行部は、完全に右派の手に落ちる。このような事情に、広東政府からの経費支給が停止されるという、更に深刻な事情が加わる。広東では商団事件が起り、それへの対応に忙殺され、上海への経費支給が停止されたのである。十一月馮玉祥との和平交渉に北上する孫文に対して、毛沢東等十四名は連名で手紙を書き、四ケ月にもわたって月給が欠配している事情を訴えるが、孫文にも有効な対処方法はなかった。このような事態の中で、中共党員は相ついで上海を離れることになる。こうして国民党上海執行部は、完全に国民党右派が掌握する所となるのである。[10]

毛沢東の国民党を革命党として再組織しようという企図は、以上のような経過をたどって、無惨にも失敗に帰するのである。この間毛沢東がいかに国民党の革命党への再組織という課題に真剣に取組んでいたという事には、いくつかの証言がある。それらの証言から浮んでくるのは、全身全霊をかけてと言うにふさわしい、自己の全生活を活動に投入した毛沢東の姿である。この時代一緒に生活していた羅章龍は、次のような内容の回想を書いている。[11] 毛沢東と楊開慧、蔡和森と向警予、そして羅章龍は上海閘北公興路三曽里の二階建に住んでいたが「三兄弟」と称して偽名を使っていた。内部では遵守すべき規律として、料理屋に行ってはならない、芝居、映画を見ない。外では写真を撮ら

ない、上海の町を歩きまわらない、外出する時は人気のない所を散歩する、休日には呉淞砲台、兆豊公園、遠くは松江、太湖、虎丘、蘇州へは旅行してもよい。外部に対しては厳格な秘密を守り、党関係者以外は親戚知人と言えども家には入れない、というようなことを定めていた。遠く故郷から訪ねて来た人ですら家に入れることは断った。一種非合法活動者の生活のような、厳しい規則である。また国民党職員として一緒に働いた人物の回想もある。彼は次のように書いている。[12]「彼は話す時には、いつも視線を自分の鼻に集中させていた。彼の記憶力が集中していることが解った」「彼はどんな小さな事でも注意して考察した。例をあげると、私が環龍路四十四号で同僚であった時、彼は部屋の中や路上で何かの紙屑を見つけると、必ず拾ってきて細かく調べ、何かの秘密を発見しようとした」。

このように全力を傾注した、国民党工作が失敗したのである。大きな精神的打撃を受けたであろうことは、想像に難くない。これに追打ちをかけるように、党内からの批判にさらされる。国共合作の中に新しい中国革命の可能性があると信じ、その可能性を全力を尽くして追求した毛沢東に対して、教条的イデオロギー派が襲いかかるのである。張国燾は、毛沢東が一九二四年五月の中共中央の拡大中央執行委員会に出席しなかった事にふれ、いささかの皮肉をこめて「毛沢東はその時、上海と長沙の間を奔走して国民党の工作に忙しく、それで会議に参加できなかった」[13]と書いている。そしてまた彼は、一九二四年五月毛沢東が「上海の中共党員会議で〝すべての工作は国民党に集中せよ〟という言論を発表し、多数の同志の反対にあった」[14]とも書いている。毛沢東の国民党の中に埋没した感のある活動は、党派性の主張の強い党内の人々からは、非難をあびていたのである。李立三に到っては、毛沢東を「胡漢民の秘書」と嘲笑したという。[15]

毛沢東が党内から国民党に傾斜しているという批判を受けていた事は、中共四回大会の人事もそれを傍証している。二五年一月上海で開催された四回大会には毛沢東は出席していない。そしてこの大会で、毛沢東は中共中央の職務を

すべて失うのである。それとは対照的に、中共三回大会で国共合作に反対し、中共中央の指導部から退けられていた張国燾が中央執行委員として返り咲いている。この事実は、中共中央に国民党に傾斜しすぎることへの批判が強まった事を示している。

コミンテルンが中国革命に対して、言わば策略的戦術として提起した「国共合作」という政治路線を、革命路線の本筋として受取り、中国革命において最も有効な政治路線として誠実に実践してきた毛沢東に対して、イデオロギー的にはコミンテルンの本流に立つ立場からの攻撃が襲ってきたのである。民族の大多数を結集する国民運動を形成するために、その中心政党となるべき国民党の再生という課題の解決に向けて、真剣に活動する毛沢東に対して、観念の高みに立つイデオロギー派から、党派性の無視だという、この上ない「正当」な非難が浴びせられてきたのである。コミンテルン運動の立場からすれば、この批判はまぎれもなく「正当」である。それはコミンテルン運動の全体像を理解しないまま、運動者の視点から、国共合作の持つ有効性に着目して、そこに没入した毛沢東の盲点を突くものであったと言うべきであろう。この批判は毛沢東を深く傷つけるのである。

毛沢東はこれまで全力を投入してきた、上海国民党改組工作の失敗と党内の批判という二重のダメージを受けて、一時の運動からの撤退を決意する。一九二四年十二月、彼は病気療養を理由に故郷韶山に帰るのである。確かに証言もあるように、彼が神経衰弱にかかり、不眠に悩まされていたのは事実である。[16] しかし実は病んでいたのは、身体よりも精神であろう。彼は深い挫折感とある種の将来への一つの見通しを持って、故郷韶山へと引き上げるのである。政治生活における毛沢東の最初の挫折の経験である。しかし、半年余りの故郷での生活は、毛沢東に新しい生命を与えたようである。地底に燃えるマグマのような、社会の底辺に生き続ける農民達の生命の炎にふれることによって、毛沢東の精神は再び蘇えるのである。彼は自信あふれる革命家として再び広州へ旅立つことになるのである。

㈢故郷韶山での農民運動

病気療養を名目に革命運動の中心地上海を離れて、故郷韶山へ帰る毛沢東の胸を去来していた想いは一体何であったであろうか。このことについて、彼自身は全く何をも語っていない。しかし、この時の毛沢東の胸を去来していたものが、民衆を離れた所での政党政派による合作という政治劇の不毛さと、そこで精力をすりへらすことの空しさへの想いであり、同時に人民大衆の中に足を据えた、真の革命運動と言うにふさわしい運動構築への熱望であった事は確かであろう。三回大会で発言した農民運動の組織化、国民の圧倒的多数を占める農民の中で革命運動を組織する事、この事こそは、この時毛沢東が秘かにその胸の中に秘めていた壮大なプランであった。

二五年一月中旬、子供二人をつれて、長沙板倉岳の楊開慧の母の家で春節を過ごした毛沢東夫妻は、二月六日韶山へ帰りつく。全国的に名を成した毛沢東を、親族と故郷の人々は熱烈に歓迎してくれるが、毛沢東はそのような雰囲気の中に長く安住している事はなかった。彼はすぐに自分の構想を実現するための活動にとりかかる。最初に行ったのは農村の実態調査である。彼は親戚、知人、同級生、近辺の農家を訪問しては話を聞き、農村の実情への理解を深める。塾時代の教師、毛簡臣、李漱清、開明紳士として有名な龐担直等を訪問したのも、この目的のためであった。また親しい人々を招いては世間話をし、時事を論じ合った。この時毛沢東の家を頻繁に訪れたのは、安源炭鉱から帰ってきた共産党員毛福軒、貧しい知識人毛新枚、小学教師鐘志中、李耿侯、龐叔佩といった人々であった。そしてこれらの人々こそは、韶山における農民運動の中核となるのである。

農村の実情を理解し、一定の協力者を確保した毛沢東は、すぐに農民運動の組織化に取りかかっている。中核となるのは、やはり中共党員である。六月末毛沢東は中共党韶山支部を成立させる。自宅の二階で秘密裏に新入党員の入

党儀式を行ったのである。書記は毛福軒である。中共党韶山支部は二五年の末までには、百名近い党員を擁するまでになっている。次に取組んだのが、秘密の農民協会の組織である。地主の苛酷な収奪と、貧しい生活への不満が農民の中には渦巻いており、毛沢東は党員の活動家とともに、この農民の不満を農民協会へと組織していくのである。そしてこの農民協会で夜学校を開き、漢字や珠算を教えながら、三民主義を説き、国内外の時事問題を農民に説き聞かせたのである。公立学校の施設や詞堂を利用しながら、夜学校を運営するという方式で、韶山一帯には、七月末までには二十数ケ所のそれが開かれている。講師は秘密農協の活動家達がつとめ、楊開慧も講師の一人として活動している。これらの活動の結果として、韶山一帯にはいくつかの秘密農民協会を組織することに成功するのである。

共産党員を中心として、運動の中核的担い手を養成することを基礎として、より広く大衆性を持った運動を展開するというのが毛沢東の運動の手法であるが、ここでは「雪恥会」の組織と運動がそれであった。「雪恥会」とは、「五・三〇」事件による、日本軍の中国人民に対する惨殺に抗議する、全国的に高揚した抗議運動の一環であるが、韶山でも毛沢東と秘密農協幹部によって、「列強を打倒し、国恥をそそぐ」というスローガンの下に、「雪恥会」が組織されるのである。六月には韶山一帯に二十数ケ所の郷に雪恥会が成立する。七月にこれら郷の雪恥会を基礎として湘潭西二区の「雪恥会」が成立する。成立大会には大会代表六、七十名、参会者は三、四百人という盛況であった。この「雪恥会」の組織とともに、毛沢東が国民党の組織化にも精力を集中していることにも注目される。この地区では趙恒惕の弾圧下で、国民党の組織も、秘密組織としてしか組織できないのであったが、国民革命の中心勢力は国民党であるとする毛沢東の信念は、この時代にもいささかも揺らいでいない。七月初めに韶山に国民党七区党部を成立させ、常務委員となっている。湘潭西二区の「雪恥会」を成立させる主体となったのが、この国民党組織である。国民党支部結成のために奔走する毛沢東の姿は、この時に国民党の責任者をつとめた賀尓康の日記に活写されている(1)。

以上のような、毛沢東の韶山での農民運動の総決算となったのが、地主に対する米価闘争であった。二五年夏韶山一帯は烈しい旱魃に見舞われる。食糧不足は価格を高騰させ、農民が飢餓に追いつめられるのは、いつもの事であった。この時飢える農民達を尻目に、地主達は価格の高い町の方に穀物を移送して売り出し、暴利を手にするというのも地主達のきまったやり口であった。毛沢東は飢饉に際して、これまでの地主のやり方を黙認することは、これまでの農民運動の成果を無にすることだと考えて、組織の総力をあげて対地主闘争に立ち上がるのである。毛沢東は共産党員、秘密農協会員を召集し、地主に米を低価格で売り出させる交渉を行うが、この交渉は決裂する。地元農民との交渉を拒否しつつ、ひそかにこの一帯の中心地銀田鎮への穀物移送の準備を進めている地主達に対して、毛沢東等は鎌や鍬で武装した数百人の農民を動員し、実力でその移送を阻止する。そしてついには地主に安価で穀物を放出させることに成功するのである。この毛沢東の指導する闘争の勝利は、附近一帯の村々に大きな影響を及ぼし、各地の村での同様な闘いは相ついで勝利するのである。

韶山一帯での農民運動の高揚は、当然のことながら地主の警戒心を呼び起し、地主は湖南省都督趙恒惕へと通報する。事情を知った趙は、農民運動の背後にあるのは毛沢東だとして、毛沢東の逮捕を命令し、すぐに兵隊を派遣することになる。こうして毛沢東は趙恒惕から追われる身となって、やむなく韶山を離れねばならなくなるのである。[2] 八月末農民達の庇護の下に長沙へ移った毛沢東は、更に当地の革命のメッカ広州へと向って旅立つことになる。こうして故郷韶山における毛沢東の半年余りの農民運動は幕を下すことになるのである。

この半年余りの経験で、毛沢東は何を考え、何を得たのか。この問題については彼自身は殆んど書いていないから、その内容については正確には伺い知ることはできない。しかし彼のその後の行動から見て、一つ確実に言える事は、この時、彼がその後の彼の生涯を決定する大きな啓示を、胸に深く蔵していたという事である。農民の力量と農民革

命への確信である。毛沢東は生涯の方向を決定する、一つの決意を胸に秘めていたのである。それは未だ理論というはっきりとした形をとるに到っていたとは考えられない。しかし、この時毛沢東は中国革命への自分の確信をつかんでたという自信にあふれていた。

広州から故郷に帰ってきた毛沢東と故郷を出る毛沢東は、全くの別人であった。農民の持ったくましい生命力と不屈の闘争のエネルギーは、傷ついた毛沢東の心を癒し、彼の身体に巨大なエネルギーを注入した。彼は確信にあふれ、大きな自信に胸をふくらませて、新しい革命運動への挺身を目指して広州へ旅立つ。このような自信と意欲に満ちた毛沢東の姿を、われわれ詩人毛沢東の初期の傑作、雄篇と言うにふさわしい「沁園春、長沙」に見ることができる。

㈢沁園春、長沙

趙恒惕から追われて広州へ行く途中の毛沢東は、旅行の間よく文章を書いたという。広州の農民運動講習所に学習に行く数人と一緒であったが、長沙から汽車で株州へ行き、そこから衡陽に行き、そこに一泊し、そこから歩いて宜章に行き、そこでまた一泊し、宜章から歩いて坪石を経て韶関に出て、そこから汽車で広州へ向うという旅であった。途中逮捕される危険が常につきまとう旅であったが、毛沢東は休息の間には、いつも銅製の小さな墨壷を開いて毛筆で文章を書いたという。宜章に着いた時、趙の兵隊が道端で捜索を続けているという情報を得て、毛沢東は旅行中書いたものを焼き捨ててしまった[1]。この詞もこの旅行中に創作されたものだと推測されるが、好運にも残されたのである。

「沁園春、長沙」は「沁園春、雪」とともに、毛沢東の詞の中でも双璧をなす傑作である。全編には固い確信を抱いて、再び革命運動に出発する毛沢東の高揚した感情がみなぎっており、その叙情の気宇は壮大である。人間毛沢東の

スケールの大きさを感じさせる作品である。

沁園春　長沙

独立寒秋
湘江北去
橘子州頭
看、万山紅遍
層林尽染
漫江碧透
百舸争流
鷹撃長空
魚翔浅底
万類霜天競自由
悵寥廓
問　蒼茫大地
誰主沈浮
携来百侶曾游
憶往昔峥嶸歳月稠

独り寒き秋に立てば
湘江　北に去る。
橘子州頭
看よ、万山に、紅あまねく
層わる林、尽く染りたり
みはるかす江、碧く透り
百しき舸　流れに争う
鷹　長けき空を撃ち
魚　浅き底を翔ぶ
万類、霜ふりし天に自由を競うかな
廖廓たるにむかいて悵き
問う、蒼茫たる大地よ
誰か、沈浮を主どる
百の侶を携え来り、曾て遊びき。
往きし昔を憶えば、峥嶸たる歳月 稠れり。

恰　同学少年
風草正茂
書生意気
揮斥方遒
指点江山
激揚文字
糞土当年万戸侯
曽記否
到　中流撃水
浪遏飛舟

ときもよし、同学の少年
風草、正に茂りに
書生の意気
揮斥にして方に遒かりき
江山を指占い
激むると揚むる文字もて
当年の万戸の侯を　糞土とせり
曽て　記えてありや　否や
中流に到りて　水を撃ち
浪　飛ぶがごとき舟を、遏めしこと。

（竹内実訳）

「独り寒秋に立」つ毛沢東は、北に向って流れ去る湘江、万山層をなして紅葉していく山々と対峙し、碧く澄みきった湘江を行きかう、おびただしい舟、高く空を撃つかのように鋭く飛ぶ鷹、水中に身を躍らせる魚という眼前の光景を眺めつつ、「万類霜天に自由を競うかな」と詠嘆する。そしてこの生きとし生けるものが、自らの生命を充分に発動させて生きているこの世界を、一体が誰が主宰しているのかと、「蒼茫たる大地よ、誰が沈浮を主どる」と問いかける。このように天地に問いかけた毛沢東は一転して、自己の青春を回顧する。新民学会の仲間達とはこの湘江に舟遊びをし、国事を論じ、ともに天下のためにつくす事を誓い合った。その豊かで激しい内容を持つ青春時代を回顧して毛沢

東は詩う。「往きし昔を憶えば、崢嶸たる歳月稠れり。恰、同学の少年、風草正に茂さかりに、書生の意気、揮斥にして方に遒かりき、江山を指点し、当年の万戸の侯を、糞土とせり」。そして最後に晋の武将祖逖が長江の水流で、揖で水面を打ち、北伐の完成を誓ったという故事を踏まえて(2)、「曽て記えてありや否や、中流に到りて、水を撃ち、浪飛ぶがごとき舟を遏めしこと」と詩って結ぶのである。

この詞の主題は、自己への回帰にある。独り寒秋に立ち、蒼茫たる天地と対峙して立つ毛沢東は、この世界の生きとし生ける者は、すべて自己の生命を躍動させ、自由を求めて生きるものだと自己に確認する。そして自分達新民学会の同志の、「青春の志」の正しさを再確認するのである。一度挫折を経験した毛沢東は、政治路線やイデオロギー論争といった表層的な問題を超えて、もっと深く、この天地の間に立つ一人の人間として、天地を主宰する原理に照らして、自分自身の「青春の志」の「正しさ」を、自分自身に再確認しているのである。これ程に深く、本質的な自己確認はないであろう。これが革命家毛沢東の人間としての再出発である。この蒼茫たる大地に、独り立つ人間としての自己を深く確信する事で、毛沢東は再出発しようとしているのである。

自分自身に回帰し、自己自身を深く確信する事は、同時に世界の存在そのものを相対化する事を意味する。絶対的と思われた規範や価値が、自分自身にとっては相対化されていくのである。この深く自己を確認した毛沢東にとっては、コミンテルンの絶対的権威も、ロシア革命の規範性も、そしてマルクス主義の諸テーゼも、すべてがその絶対性を喪失し、相対化されていったであろう。毛沢東はそれらの規範の持つ絶対性の拘束から、精神的にある種の解放を獲得したのである。それこそが革命家毛沢東にとっての人間的主体の確立という事であった。「沁園春、長沙」は毛沢東のこのような人間的営為の記念碑的作品として読むことができるのである。

しかしその事は、必ずしもこの時に毛沢東が、コミンテルンの革命運動への批判を意識化していたという事を意味

するものではない。毛沢東のその後の行動をたどってみれば、彼は再び国共合作の政治路線を忠実に実践しているし、中共党への批判的言動も全く表明していない。毛沢東の行動は、依然としてコミンテルンの指導する国共合作という政治的枠組の中にある。しかし、ただ一点以前の毛沢東とは異っていた。農民運動への確信である。毛沢東の行動は、この政治的枠組の中で農民運動という一点に集中されている。毛沢東は農民運動こそが、中国革命の主要な内容でなければならないと固く確信し、そのために全力を注いでいるのである。その他の革命運動の一切の問題については、毛沢東は殆んど言及しない。毛沢東のこれらの問題への批判は、農民運動の展開とともにその輪を拡げていくのであって、決してこの時点から存在していたのではないのである。

毛沢東はこの時点では、農民運動という中国革命にとっては、言わば「梃子の支点」ともなるべきものへの認識を持ち、そのような自己に対して深い確信を持っていたに過ぎないのである。しかしこのような人間毛沢東こそは、すべての源泉であった。中国革命への新しい思想、新しい戦略、新しい運動、それ等すべてを生みだす創造力の源泉であった。このような革命的主体としての人間毛沢東が、挫折をくぐりぬけて、故郷韶山における農民運動を経験することによって生み出されたのである。自己への絶対的確信、それ故に、この世界のあらゆる存在を自己自身にとっては相対化していく、この精神構造にこそ人間主体としての革命家毛沢東誕生の秘密があった。そしてわれわれはこのような革命家毛沢東誕生の背後には、青春時代における彼の血のにじむような人間形成の研鑽があったことを忘れてはならないであろう。

毛沢東は探求のはてに、「精神の個人主義」と自ら名づける思想的立場に行きついた。彼は「個人がなければ宇宙はない。故に個人の価値は宇宙の価値より大きいと言える」(3)と宣言し、また「宇宙の間で尊ぶべき者はただ自分だけであり、恐るべき者も自分だけであり、服従すべき者も自分だけである」(4)とも言った。また彼は個人＝自我の絶対性を

主張して、「個人はただ自分に対する義務があるだけで、他人に対する義務はない」[5]と言い「人類の目的は自我実現のみにある」[6]と断言したのであった。「沁園春、長沙」から響いてくるのも、この自我の絶対性の主張である。この自我の主張が、抽象的な哲学的主張から、具体的現実的な革命路線の主張へと転換する時、革命家毛沢東が誕生するのである。コミンテルンの絶対的権威に抗して、自らの革命路線を切り拓いてゆくという事は、このような強烈な自我の主張なくしては、決してなしとげられなかったであろう。その意味で革命家毛沢東の根底には、青春の毛沢東が生き続けているのである。

結　語

第一次国共合作期の毛沢東は、陳独秀路線そのままに、国民革命の担い手として国民党を再組織する仕事に全力を傾注していた。しかしこの毛沢東の活動は、国民の多数派を形成せずしては、革命は勝利することはないという、実践運動家としての毛沢東の信念から出たものであった。しかし、この毛沢東の活動は実践的に破綻し、党内からも厳しい批判にさらされる。心身ともに傷ついた毛沢東は、故郷韶山に帰るが、そこで発見したのが農民運動の持つエネルギーであった。毛沢東は新しい確信を持って再び革命の中心広州に姿を現す。この時の毛沢東は、それまでの毛沢東とはただ一点におい異なっていた。農民運動の革命運動として持つ力量を深く確信し、そのような確信を持つ自己に対して、絶対的な確信を持つという一点においてである。

この毛沢東こそが、革命家毛沢東の人間的主体であった。すべての創造を生みだす根源としての人間主体であった。以後の毛沢東路線と言われる中国革命の思想と戦略路線は、この毛沢東の独創として展開されていくことになるので

ある。だがこの仕事を、毛沢東はコミンテルン指導下の国共合作という政治的枠組の中でやりとげようとする。従ってこの時点では、毛沢東はコミンテルン運動への理論的、運動論的な批判はあまり意識していなかったと考えられる。毛沢東の批判の特質は、運動の展開に応じてその範囲を拡大していくという点にある。毛沢東は農民革命の展開に応じてコミンテルンと党中央への批判と対決の姿勢を明らかにしていくのであるが、それはこれから以後の事である。

最後にわれわれが確認しておきたいのは、革命家毛沢東誕生の基底にあったのが、彼の強烈な自我意識であり、自己に対する絶対的確信であったという事である。この自我意識こそが、世の権威を相対化し、自己の精神に自由を回復させたのである。毛沢東は創造力をこのようにして獲得したのである。コミンテルンという権威に対して自己の革命運動を創造していくためには、この強烈な自我意識は必須のものであったと考えられるが、毛沢東がこの自我意識の原型を形成したのは、彼の青春時代であった。そこで形成した「精神の個人主義」という絶対的自我の主張こそは、それが革命路線という現実的内容を獲得した時、革命家毛沢東へと生長していったのである。その意味で革命家毛沢東の根底にあるのは、青春の人間毛沢東なのである。

註

題目について

この論文は毛沢東㈢としたが本来は毛沢東㈣とすべきものである。毛沢東㈢は「理想主義の形成とマルクス主義の受容」と題するもので枚数の関係でここには発表しない。後日、まとめて発表する時に、一緒に発表したいと考えている。

問題の所在

(1)「国共合作」については、様々な見解がある。例えば党史研究の優秀論文とされた論文の中でも次のような見解の相違が見られる。

中共党史研究優秀論文選（一九八一―一九九一）中央党校出版社（一九九二年）

于曉張「中共第一次国共合作的策略演変」

この論文は国共合作を三つの段階に分け、第一段階の戦術は正しく、第二段階は部分的に誤りが表われてきた。第三段階に全面的に間違ったとしている。

肖甡「大革命時期中共対国民党関係的策略」

コミンテルンの指導は「合作」に主張があった。これが悲劇の所在であるとしている。

鄭應洽「関于〝党内合作〟問題的探討」前同　一四八頁

党内合作は歴史的条件によって決定されたもので革命の必要であったとしている。

第一節　結党と労働運動

(一)結党の準備

(1) 毛沢東「発起文化書社」毛沢東早期文稿　湖南省新華書店（一九九〇年）四九九頁　以下「文稿」と略称

(2) 易礼容「関于文化書社的一次談話」新民学会資料　人民出版社（一九八六年）五三一頁

(3) 毛沢東「組織俄事研究会」前同　三五三頁

(4) 李鋭「早年毛沢東」遼寧人民出版社（一九九三年）三六四頁

(5) 前同

(6) 蕭喩「毛沢東青年時代」明報出版社（一九七七年）二八六頁

(7) 前同　二九四頁

(二)中国共産党第一回全国代表大会

(1) 中国共産党第一個綱領　中共中央文件選集(1)　中共中央党校出版社（一九八九年）三―六頁　以下「選集」と略称

(2) 中国共産党第一個決議　前同　六―九頁

(3) 以下の記述は李新、陳欽健主編「偉大的開端」中国社会科学出版社（一九八三年）四三二―四六八頁による。

(4) 劉仁静の回憶「〝一大〟前後」人民出版社（一九八五年）二一五頁

(5) 包恵僧回憶録　人民出版社（一九八三年）二七頁
(6) 張国燾「我的回憶」(1)明報月刊出版社（一九七一年）一三七頁
(7) 李達的回憶　(4)に同じ　二八二頁

(三)湖南での結党活動

(1) 衡陽市湖南学生連合会旧陳列館
「編懐毛主席領導湖南青年学生運動的光輝実践」李鋭　前掲書　三八七頁より重引
(2) 毛沢東「湖南自修大学創立宣言」竹内実監修「毛沢東集Ⅰ」蒼々社（一九七二年）八一―八四頁
(3) 毛沢東「新時代発刊詞」前同　八五頁
(4) 李鋭　前掲書　二六九頁

(四)初期の労働運動

(1) (二)―(2)に同じ
(2) 李鋭　前掲書　四一六頁
(3) 前同　四一九頁
(4) 李立三からの聞き取り　前同　四二九頁
(5) 前同　〃　四五三頁
(6) 前同　〃　四五二頁
(7) (二)―(6)に同じ　二九五頁

第二節　コミンテルンの運動と国共合作路線

(一)コミンテルンの中国への着目

(1) ジェーン・デグラス編著「コミンテルン、ドキュメントⅠ」荒畑寒村等訳　現代思潮社（一九六九年）五三頁
(2) 例えば張国燾前掲書　二四〇頁

(二)国共合作路線の政治的性格

(1) コミンテルン第二回大会で採択された民族および植民地問題に関するテーゼ、前掲「コミンテルン、ドキュメント」二二五頁

(2) コミンテルン第四回大会で採択された東方問題に関するテーゼ　前同　三四〇頁
(3) 国民党に対する中国共産党の態度に関する決議
日本国際問題研究所中国部会編「中国共産党史資料集Ⅰ」勁草書房（一九七〇年）二〇〇頁

㈢国共合作路線の形成

(1) この孫文の観点は、「国民党改組宣言」に明確に表明されている。
山口一郎等編「孫文選集」社会思想社（一九八五年）第三巻　六五頁
(2) この観点は、後期三民主義の「民権主義」「民生主義」に明らかである。前同　第一巻　一二七頁以下
(3) 黄修栄「第一次国共合作」上海人民出版社（一九八六年）八三頁
(4) 以上の記述は
郭華倫「中国共産党史論」第一巻
矢島釣次監集　春秋社（一九八八年）一三九頁より重引
(5) 陳独秀「怎麼打倒軍閥」陳独秀著作選　上海人民出版社（一九九三年）第二巻　四三七頁以下
(6) コミンテルン第四回大会における劉仁静の報告　前掲「中国共産党史資料集Ⅰ」一八九頁
(7) 包恵僧「回憶第一次国内革命戦争」節録「〝二大〟和〝三大〟」中国社会科学出版社（一九八九年）六〇〇―一頁
(8) ハロルド・R・アイザックス
鹿島宗二郎訳「中国革命の悲劇」上　至誠堂（一九六六年）一五一頁
(9) ロバート・C・ノース著
現代史研究会訳「モスクワと中国共産党」恒文社（一九七四年）一四四頁より重引

第三節　第一次国共合作下の毛沢東

㈠国共合作への毛沢東の態度

(1) 関于民主的聯合戦線的議決案　前掲「文献選集Ⅰ」三二―四六頁
(2) 関于国民運動及国民党問題的議決案　前同　一四六―一四八頁
(3) 毛沢東「外力、軍閥与革命」前掲「毛沢東集補巻2」一〇九―一二一頁
(4) 〃「北京政変与商人」前掲　毛沢東集Ⅰ　八七―九〇頁

(5) 張国燾　前掲書　二九六頁
(6) (2)に同じ　一四七―八頁
(7) (5)に同じ　二九七頁
(8) 黎永泰「毛沢東与大革命」四川人民出版社（一九九一年）一五六―七頁
(9) 中国共産党第三次全国大会宣言　前掲「文献選集」一六五頁
(10) 羅章龍回憶中共〝三大〟　前掲　「〝二大〟和〝三大〟」六九五頁

(二)国共合作下での活動

(1) 毛沢東「致林伯渠、彭素民」毛沢東書信選集　人民出版社（一九八三年）二三五頁
(2) 胡長水、李瑗「横空出世」中国青年出版社（一九九三年）二四六頁
(3) 張国燾　前掲書　三一九頁
(4) 黎永泰　前掲書　一七一頁
(5) 中国国民党中央部第四次会議宣読第三次会議記事録　前掲「毛沢東集補巻2」一二五―六頁
(6) (4)に同じ　一八〇―一頁
(7) 前同　一八一―二頁
(8) 〃　一八二頁
(9) 〃　一八二―三頁
(10) 〃　一八六頁
(11) 前掲羅章龍回憶　六八七―九頁
(12) 王唯謙「毛沢東」「現代史料」第一巻　三三頁
(13) 張国燾　前掲　三三〇頁
(14) 前同　三七六頁
(15) スチュアート・シュラム「毛沢東」紀伊国屋書店（一九六七年）五五頁　石川忠雄訳
(16) 賀尓康日記　湖南歴史資料（一九七九年）七〇―七七頁　黎永泰著より重引　一八六―七頁

(三)故郷韶山での農民運動

(1) 前掲　賀尓康日記

(2) 以上の記述は中共中央文献研究室編「毛沢東年譜」上巻　一三一―一三七頁による

㈣ 沁園春、長沙

(1) 第五回農民運動講習所で学習した周振岳の回想　前掲「年譜」一三七頁

(2) 竹内実、武田泰淳「毛沢東その詩と人生」文芸春秋新社（昭和四〇年）五五頁

(3) 毛沢東「倫理学原理」批注　文稿　一五一頁

(4) 前同　二七一頁

(5) 〃　二三五頁

(6) 〃　二四六頁